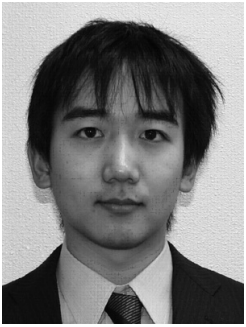
司法修習後、
ウズベキスタンで日本法を教える



社本洋典氏（名古屋大学特任講師）

2004 年 4 月、名古屋大学法科大学院未修コースに入学、2007 年 3 月に卒業。同年第 2 回新司法試験に合格。新第 61 期司法修習生に。司法修習終了後は、2009 年 4 月から、ウズベキスタンの日本法教育研究センターで日本法講師に。

社本先生は、司法修習を終えられて間もなく、名古屋大学から派遣されて、法整備が不十分なウズベキスタンへ赴き、ウズベキスタンの将来を担う法学部生に日本法を教える日本法講師をされている方です。

Q1　ウズベキスタンへ行くことになった経緯・きっかけは何ですか？

司法試験に合格して、修習を行っているときに、同じ班の人から、法科大

学院時代に名古屋大学の鮎京先生からウズベキスタンに行かないかと誘われたという話を聞ききました。当時内定先事務所は決まっていたのですが、このまますぐに弁護士としての生活を送ることに少し疑問を持っていたこともあり、一度鮎京先生にお会いしてお話を聞きたいと思って、その方に連絡を取ってもらって、鮎京先生とお会いしました。そうしたら、その日のうちにウズベキスタンか、ベトナムか、モンゴルか、カンボジアのどこに行きたいかと言われたので、思わずウズベキスタンがいいですと言ってしまったのがきっかけです（笑）。

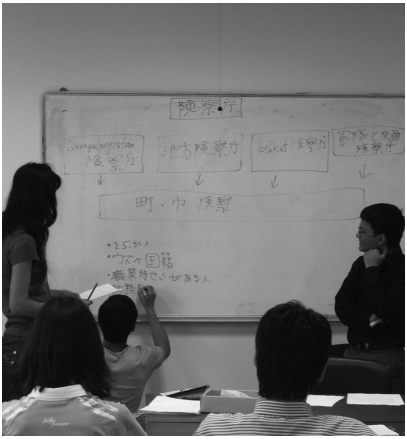
Q2　どのような目的でウズベキスタンへ赴任されているのでしょうか？ウズベキスタンでの活動内容を教えてください。

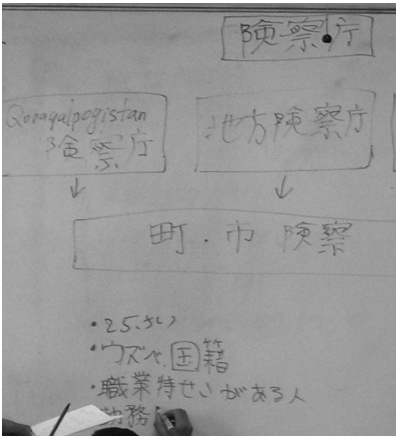
私が所属している名古屋大学日本法教育研究センターでは、法整備支援事情の一環として、ウズベキスタン、モンゴル、ベトナム、カンボジアの大学を対象に、日本語教育及び日本語による日本法教育を行っています。

これは、現地の大学に日本語講師及び日本法講師を派遣して、現地の学生に日本語及び日本法を学ばせ、自国の法制度と比較させることにより、自国の法制度の不備を研究させ、それらの制度を改善させていくというもので、将来の自国の法整備をになう若手を養成することを目的とした法整備支援プロジェクトです。また、特に優秀な学生は、現地の大学を卒業後、名古屋大学その他の日本の大学院へ留学させ、日本で研究をさせることも目的としています。

私は日本法講師として、現地の３年生４年生を対象にして、日本の法制度

の概要を講義し、また、日本で研究するために書く研究計画の指導などをしています。





日本法教育研究センター・ウズベキスタンでの授業

Q3　活動をしていて感じること等をお話いただけますか？

外国語で勉強すること、しかも法制度のような複雑な制度を勉強することはとても大変なことです。しかし、現地の学生達は、非常に一生懸命に勉強しており、３年生の段階では法律の講義を理解できるほどに日本語を身につけてきます。現地の学生達は日本の大学院に入学して勉強するということにとても意欲を持って、一生懸命に頑張っていますので、その手助けをしていきたいと思っています。

Q4　今後の先生の展望について、聞かせてください。

ウズベキスタンには2年ほど赴任する予定です。それが終わった後は未定ですが、いくつかの選択肢は考えています。どちらにしても、修習後そのまま就職する場合よりは、選択肢が広がっているような気がしています。

Q5　世界で起こっている人権問題に対し、日本にいながらにして、貢献できることがあるとすれば、どんなことが考えられるでしょうか？

実際に、途上国に行って支援活動を行うというのはなかなか大変な決断がいると思います。せっかく司法試験を合格して修習生になったのに、いきなりそんな茨の道を進むことを積極的に進めたりはしません（笑）。

人権活動に貢献するというと、大きな事をしなければならないように思えてしまいますが、決してそんなに大変なことではないと思います。例えば、人権活動をしている団体に募金をするというも貢献の一つですよね、あまり難しく考える必要はないのではないでしょうか。まずは、世界で起こっている出来事に興味を持ち、意欲的に情報を集め、何か貢献できる機会がないかということを考えていれば、必ずその機会は何らかの形で訪れると思います。

Q6　最後に、修習生に対して一言、お願いします。

弁護士、検察官、裁判官としての活動は非常にすばらしいものですし、修習後すぐにその職について、その活動をずっと続けていくことは人生の選択として非常によいことであると思います。

ただ、もし修習生になった後で、自分の将来について迷っている方がいたら、すぐにその三者になること以外にも選択肢はあるのだよということを心の片隅に置いておいてください。もしかしたら、事務所訪問などの就職活動に追われることによって、かえって、自分で自分の可能性を狭めているのかもしれません。

法曹資格というものは、思った以上に自分の可能性を広げてくれるものだと思います。歳をとってから後悔しないように、若いうちにしか出来ない経験を自ら積極的に行っていってください。

［文責：久保田祐佳］